
りんご物語。

はなちょこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

りんご物語。

【Nコード】

N0735M

【作者名】

はなちよこ

【あらすじ】

りんご、十七歳。両親の都合で夏休みの間だけ田舎で暮らすことになった。

のんびりした田舎暮らしの中で芽生える恋。

「よく来たなあ。二人とも上がりな」

ニコニコしながらそう言うのはお婆ちゃん。

「おじゃましーす！」

そう言っって元気良く家に入っっていくのは妹の、あんず。

「まあ。小さいのにお行儀がいいこと」

そう言ったのは私の叔母さん。

「りんごちゃんも上がって、上がって」

叔母さんの旦那さん、つまり叔父さんが私にそう言った。

私は靴を脱いで「おじゃまします」と言っって家に上がる。

叔父さんが辺りを見渡して言った。

「あれ？ 吉彦は？」

叔母さんも辺りを見渡して言う。

「あら。朝までいたのに……出かけたのかしら」

私の母が夏休みの間、単身赴任の父の所へ行くことになった。

夏休みの間だけ母のお姉さん、つまり叔母の家にお世話になることになった。

叔母さんは、旦那さんである叔父さん、叔父さんのお母さんの三人暮らしのだそうだ。

「田舎で驚いたでしょう」

叔母さんがそう言っって私とあんずに冷たい麦茶を出してくれた。あんずは喉が渴いていたらしく、ゴクゴクと麦茶を飲み始めた。

「さつき、すごく綺麗な川があつたよ」

私はそう言っって麦茶を一口飲んだ。

この辺りは本当に田舎だ。

隣の家は一キロ先だし。

すぐ裏は山だし。

ここまでの道のりも山登りみたいだったし。
でも、のどかで綺麗だ。

「りんごちゃんは、いくつになったんだっけ」

叔父さんにそう聞かれ、私は言う。

「一七になりました」

「しっかりしてるなあ。おちびさんはいくつだ？」

お婆ちゃんが、あんずにそう聞いた。

あんずは空になったコップをちゃぶ台の上に置いて

お婆ちゃんに言った。

「ちびじゃないもん！」

「あんず！」

私がそう言つと、お婆ちゃんが笑った。

「元気がいいのう」

「あんずは七歳です」

私が代わりにそう答えた。

お婆ちゃんは目を細めながら、あんずを見て言った。

「そうかあ。七歳かあ」

そして、お婆ちゃんはポツリと言った。

「菜摘より二つ年上か」

なつみって誰なんだろう……。：

そんなことを疑問に持ちつつ、叔母さんに私達が寝る部屋に案内してもらった。

「階段ギーギー言うねー！」

「もー。あんず！」

「ふふ。いいのよ。りんごちゃん。もうこの家も古いからねえ」

叔母さんがそう言いながら、二階の隅の部屋のドアを開けた。

「ここがあなた達が寝る部屋よ」

私は部屋を見渡した。

六畳ほどの古いけど、さっぱりした和室だった。

「疲れたでしょ。夕飯になったら呼ぶから、少し休んでたら？」
叔母さんの言葉に、私は頷いた。

「ふう」

私はそう言っただけ荷物を置いた。

「お姉ちゃん」

あんずがそう言っただけ私を呼ぶ。

「なに？」

「うさぎさん」

あんずがそう言っただけ柱の下の方を指差す。

そこにはピンク色のペンでうさぎの落書きがしてあった。
子供が描いたものだ。

お婆ちゃんがさっきポツリと呟いたのを思い出す。

なつみちゃん………？

叔母さんと叔父さんには息子が一人いるだけだ。

しかも、もう社会人で一人暮らししている。

従姉妹に小さい子なんていないけどなあ。

疲れていて夕方まで眠ってしまった私達。

叔母さんに夕飯を呼ばれて

夕飯を食べた後、しばらく話をして。

叔母さんが言った。

「りんごちゃん、あんずちゃん、お風呂入って来たら？」

「そうだな。ちょうどお風呂がわいたところだ」

叔父さんも言う。

私はあんずに言った。

「あんず、お風呂行くよ」

「あんず、お婆ちゃんとお風呂入るからいい」

あんずはすっかりお婆ちゃんになついている。

「りんごちゃん、一人でゆつくり入っておいで」

お婆ちゃんがそう言ったので、私はお風呂場へ行った。

「あんず、お婆ちゃんに迷惑かけなきゃいいけど」

私は一人でお風呂に入りながらそう呟く。

ガラガラ。

脱衣所のドアを開ける音。

「あんず？」

私がそう言っていると、お風呂場のドアが開いた。

「夏子？」

そう言って顔を出したのは。

見知らぬ男の人だった。

「キヤアアアアアア！」

「なんでお風呂に誰か入ってるのか聞かずにドアを開けるんだよ！」
叔父さんが怒鳴る。

「だって。見慣れない服があるから……」

見知らぬ男の人……いやお風呂を覗いた男がそう言う。

「見慣れない服があるからって覗くんじゃないの！」

今度は、男に叔母さんが怒鳴った。

「夏子さんと間違えたんだろう」

お婆ちゃんがそう言う。

お婆ちゃんの言葉に男は黙った。

そういえば。

「夏子」って言ってたっけ。

「ごめんな」

男はそう言って謝ってきた。

「いいですよ……」

湯船に入ってたから私の裸もあんまり見えなかったのと。

男が服のまま覗いたのが救いだっただ。

「紹介遅れたけど、この覗きのおじさんは、吉彦。叔父さんの一番下の弟」

叔父さんがそう言う。

「嫌な紹介の仕方すんなよ、兄貴」

吉彦おじさんは「おじさん」と言うほどの歳には見えない。

私は吉彦おじさんにペコリとお辞儀をした。

そして、二階にバタバタと上がって行った。

「覗きなんかするから、りんごちゃん怒っちゃっただろ」

叔父さんがそう言うって吉彦おじさんをドンと押す。

「故意で覗いたわけじゃないって！」

吉彦おじさんはそう言うって困った顔をした。

これが、おじさんとの出会いだった。

夜。

辺りは静かで。

隣で寝ている、あんずの寝息が聞こえるだけだった。

私はガバツと布団から起き上がる。

そっとドアを開けて。

廊下に出た。

窓の外を眺めた。

すぐ裏は山だ。小さな山だけど。

空を見上げた。

星がいっぱい見える。

「なんだ、眠れないのか」

そう言うって隣の部屋から、吉彦おじさんが出てきた。

隣、吉彦おじさんの部屋だったんだ。

私は何も言わずに夜空を見上げた。

「まだ怒ってるのか。ごめんな」

吉彦おじさんはそう言って頭を下げる。

「怒ってないよ」

私はそう言っくとまた夜空を見上げた。

「そうか」

吉彦おじさんはそう言って私の隣に座った。

「おじさんも眠れないの？」

「おじさんじゃない。まだ二八歳」

「でも、お兄ちゃんって感じでもないし」

「そうだな」

吉彦おじさんはそう言って笑った。

「こら。ニンジン残しちゃダメだろ」

次の日の朝食。

昨日よりにぎやかになった食卓。

吉彦おじさんは、そう言っくと、あんずのお皿のニンジンをぱくつと食べた。

「ほら。おいしいぞ」

吉彦おじさんの様子をじっと見ていたあんずは、嫌いなニンジンを口に入れた。

「えらい。あんず」

私がそう言っくと、あんずはニッコリ笑った。

「えらいぞ」

吉彦おじさんは、そう言って、あんずの頭をなでた。

昨日はちっとも気づかなかったけど。

吉彦おじさんって笑った顔、すごく優しいんだ。

「お姉ちゃん、遊ぼう！」

私が宿題をしていると、あんずがそう言っつて服の裾を引っ張る。昨日、叔父さん頼んで、机を出してもらった。

「もう。宿題やってるの！ あんずも夏休みの宿題あるでしょ？」

私がそう言うのと、あんずはほつぺたを脹らませた。

「あんず、おじさんと遊ぶか！」

そう言うって部屋に入ってきたのは、吉彦おじさんだった。

私は時計を見て不思議に思った。

「ねえ。吉彦おじさん、仕事は？」

「おじさんは小説家です」

「へえ。売れてるの？」

おじさんが黙ったので、私は言った。

「……………売れてないんだ」

「いつか売れるさ」

吉彦おじさんはそう言うのと小さなボールをあんずに投げた。

あんずはそれをキャッチして吉彦おじさんに投げる。

「上手いな」

吉彦おじさんはそう言った。

私はふと聞いてみた。

「ねえ。夏子さんって誰？」

「子供は知らなくていいの」

吉彦おじさんはそう言うってボールを投げる。

「ああん。とれないー！」

吉彦おじさんの投げたボールはあんずの頭上高く上がって転がっていった。

あんずは部屋の隅のボールを取りに行く。

「前の奥さんだよ」

吉彦おじさんはポツリと言った。

そして、あんずのボールをキャッチする。

「前のつて……………」

私がそう言うのと吉彦おじさんは言った。

「ああ。先月、離婚したばかり」

「……………そうなんだ」

「一人娘も前の奥さんが引き取っていつちゃったしなあ」

「もしかして、なつみちゃん？」

私の言葉に、吉彦おじさんが驚いた。

「え？ ああ。なんで知ってるんだ？」

「お婆ちゃんが、あんずの二つ年下だって言ってた」

「ああ。お袋は、菜摘のこと可愛がってたからな」

吉彦おじさんはそう言っであんずにボールを投げる。

「なんで別れたの？」

聞いちゃいけない、と思いつつ。

思わず言葉にしてしまう。

「俺の本がなかなか売れないから、愛想つかしたんだよ」

「・・・・・・・・」

「事実、家賃が払えなくてこの家に家族そろって厄介になってたわけだし」

吉彦おじさんが苦笑いした。

私は、複雑な気分になっていた。

吉彦おじさんは毎日家にいて。

あんずと遊んでくれて、私の話し相手になってくれた。

小説は夜書いているらしい。

「気をつけてね」

叔母さんがそう言ってお弁当を渡してくれた。

「川に入っちゃいかんよ」

お婆ちゃんがそう言った。

「はい」

私とあんずは吉彦おじさんに連れられて。

近くの川へ行った。

ここへ来てもう一週間が経っていた。

あんずはすっかりお婆ちゃんと吉彦おじさんになついていた。

「あんず。川に入っちゃダメよ」

「はい」

あんずはそう言って川原の石で遊び始めた。

「しかし暑いなあ」

吉彦おじさんがサングラスをかけて日陰に座りながらそう言った。

「吉彦おじさん、変な人みたい・・・」

私がそう言くと、あんずが笑いながら言った。

「変なのー！」

吉彦おじさんはサングラスをはずした。

叔母さん特製のお弁当を食べた後。

あんずが目をこすり始めた。

「眠いの？」

私がそう聞くと、あんずは言った。

「ちよつと」

「じゃあ。帰ってお昼寝だな」

吉彦おじさんがそう言った。

その時だった。

急に強い風が吹いて、あんずの帽子が飛ばされた。

帽子は川に落ちた。

私は急いで川に入ってあんずの帽子を拾った。

川の水は私の足首くらいの深さしかなかった。

「わっ！」

戻ろうとした時、足が滑った。

「おっと」

吉彦おじさんが私の体を支えてくれたので、私は転ばずにすんだ。

私の顔は吉彦おじさんの胸にスッポリとおさまった。

「!!!!!!!!!!!!」

私は思わず抱きついてしまったことに気づいて。

吉彦おじさんから思いつきり離れた。

「あぶつ・・・」

そう言いかけた吉彦おじさんが今度は足を滑らせた。

吉彦おじさんは尻もちをついた。

私は吉彦おじさんにつかまっていたので、一緒に尻もちをついた。

「あゝあ。おばちゃん達に怒られるよー？」

あんずがそう言っただけを見た。

私と吉彦おじさんはお互いの顔を見合わせて笑った。

ぼちゃん。

湯船に入る。

私は口まで湯船に浸かった。

叔母さん達には、理由を説明したので怒られなかった。

むしろ怪我がないか心配された。

私も吉彦おじさんも服はビショビショになったものの。

怪我はなかった。

「はーあ」

私はため息をついて、湯船に頭まで浸かった。

ダメだ。ダメダメ！

その夜。

私がふと窓の外を見ると、庭に誰がいることに気づいた。

目をこらしてよく見てみた。

「吉彦おじさん」

私が庭に出てそう言っただけで吉彦おじさんが振り向いた。

「おお。りんごか」

吉彦おじさんの「りんご」の言い方はまるでお父さんみたいだ。

「あんずは？」

「寝てるよ」

私はそう言っただけで夜空を見上げた。

今日も星が見える。

月が綺麗だ。

「奥さん、恋しい？」

私の言葉に吉彦おじさんが驚いて振り向く。

「なんで……」

「だって。初めて会ったとき、私の服見て、奥さんと間違えたんでしょ？」

そう。吉彦おじさんはハッキリ言った。

「夏子」って。

前の奥さんの名前。

「ん」。まあ。愛してたからな」

「今は？」

「さあ……」

吉彦おじさんはそう言って下を向いた。
ねえ。

そんなに寂しそうな顔しないでよ。

奥さんのこと、まだ愛してるんだね？

胸がギュツとしめつけられる感じがした。

ダメ。

だけど、言いたいよ。

気づいたら、私は吉彦おじさんにこう言ってた。

「好き」

私の言葉に。

吉彦おじさんは笑って言った。

「おじさんをからかったらダメだよ」

吉彦おじさんはそう言って私の頭をポンポンとなでた。

なでられた所がカーツと熱くなっていくような気がした。

「からかってないもん」

「りんご、いくつだ？」

「一七」

「学校に好きな男の子とか、いないのか」

「・・・・・・・・いないよ」

「じゃあ、学校で好きな男の子見つけるんだな」

吉彦おじさんはそう言って私の頭をまたなでて家に戻って行った。
「早く寝ろよ」

吉彦おじさんはそう言って家に入ってしまった。

私の目から涙がポロポロ流れた。

だけど。これは予想してたこと。

いくら血がつながってないからって。

親戚は親戚。

私は吉彦おじさんの「親戚の女の子」でしかない。

それに、吉彦おじさんは前の奥さんが好きで。

そんなこと、分ってた。

次の日の朝。

なんだか一階が騒がしい。

ガバツと起きて時計を見る。

「やだ、九時！」

昨日、なかなか寝つけなかった。

私は急いで起きると、パジャマから部屋着に着替えて一階へ降りた。

「だから。いまさらなんで来るんだよ！」

「あなたに会いに来たのにそんな言い方ないでしょ！」

ドア越しに聞こえる声。

吉彦おじさんの声と・・・・・・・・女の人の声。

まさか！

「まあまあ。こうして遠いところから夏子さんも来てくれたんだから」
叔母さんの声。

夏子って・・・・・・・・。

吉彦おじさんの前の奥さん！

私は胸がギュツとしめつけられるような感覚におそわれた。私は耳をふさいで家から飛び出した。

前の奥さんが・・・・・・夏子さんがここに来た理由。

ドラマとかだと、ヨリを戻すために戻ってきたりする。

そうだ。

そくに違いない！

ああ。

吉彦おじさん、夏子さんのことまだ愛してるみたいだから。きつと二人は夫婦に戻っちゃうよ。

なつみちゃんのことだって、あるだろうし・・・・・・。

キキーツ。

自転車のブレーキの音。

「危ないだろ！」

男の子がそう言って私を睨みつけた。

でも涙をポロポロ流している私を見て驚いた。

家に帰ると。

私は何事もなかったかのように振舞った。

夏子さんはいなかった。帰ったらしい。

私は何を話したのか、とか吉彦おじさんには聞かなかった。というか聞けなかった。

吉彦おじさんは、それからしばらくはあんまり喋らなかった。

夏休み最後の日。

私が部屋で帰る支度をしていると。

吉彦おじさんが部屋に入ってきた。

「もう帰るのか」

「うん」

私はそう言った後、黙って荷物をカバンにつめた。
吉彦おじさんもしばらく黙っていた。

そして、沈黙をやぶったのは吉彦おじさんだった。

「なあ。りんご。いつか、りんごをモデルにした小説書いていいか？」

吉彦おじさんはそう言って私を見た。

「印税、私にも分けてね」

「アハハ。言うな」

吉彦おじさんはそう言ってからしばらく黙ってこう言った。

「今日、夏子と会って話してくるよ」

胸がズキツとした。

だけど。私はカバンに荷物をつめながら言った。

「ふーん。そっか」

何を話すの？そんなこと、聞けなかった。

「りんごちゃん」

庭にいたのは、あの自転車の男の子だった。

ニコニコして私に駆け寄ってきた。

あの時、吉彦おじさんが好きなこととか、色々話してしまった人。
この家のお隣さんで、私と同じ高校二年生。

「また来てね」

叔父さんも叔母さんもお婆ちゃんもそう言った。

吉彦おじさんはいなかった。

私達は一ヶ月と少し過ごしたこの家を後にした。

それから。

あの自転車の男の子とメール交換を始めた。

というか一方的にアドレスを聞かれた。

それから私達は付き合ったけど。

一年後。

私から別れを告げた。

まだ吉彦おじさんが忘れらなかった。

そして。

私が大学生になった春のこと。

「お姉ちゃん、お姉ちゃん」

あんずが突然、部屋に入ってきた。

「ちよっとー。ノックくらいしなさいよ」

「大ニユース！」

あんずは人の話も聞かずに嬉しそうに言った。

「大ニユース？」

私は走り出していた。

目的地は近くの本屋。

あんずが言ったんだ。

「吉彦おじさんっていたよね。あのおじさんの本、ベストセラーだ
って」

「吉彦おじさんの本？ 本当に？」

「うん。本当だよ。だってね……………」

本屋に入ると、すぐに目につくところに本が並べてある。

「この春、大ベストセラー小説」

そう紹介されてある、その本を手にとった。

「だってね、お姉ちゃんの名前が書いてあったもん」

あんずの言葉が頭をグルグルと回る。

私はその本を手にとってドキッとした。

すごく驚いた。

その本のタイトルは「りんご物語」
作者。

田村吉彦。

本の裏には内容も書かれている。

「りんご」という一七歳の少女が恋をしたり友情を育んだりして成長する、あつたかくてピュアな物語。

私は最後のページをめくった。

最後にはこう書かれていた。

「彼女は、いつかとても素敵な人と出会っだろう」

私はその文章を見て笑った。

目に涙が浮かんでいた。

今年の夏休みは、あんずを連れて、あの家に行こう。

あの星空を。

あの山を。

あの川を。

また、見たい。

いつか出会えるんだよね。

吉彦おじさんより素敵な人と。

（おわり）

（後書き）

読んでくれてありがとうございました。

数年前にブログに載せた小説です。

今は私も吉彦おじさんより年上になってしまいました（笑）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0735m/>

りんご物語。

2010年10月8日14時38分発行